
日本ウイルスパンデミック

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本ウイルスパンデミック

【Nコード】

N2624W

【作者名】

モンスター

【あらすじ】

沖縄でのウイルスパンデミックは、ただの始まりだった・・・

田中健太は、仲間達と共に生き残るためにサバイバルを始める・・・

プロローグ

「撃ちまくれ」

俺田中健太は、命令を出し自らも銃撃戦に加わった。

「隊長、悪い知らせです」

「何だ、言ってみろ」

「200m先から奴らの群れが来ます・・・」

この場所を守り切るのは不可能か・・・

「お前達、この第一検問所を捨てろ、撤退する急げヘリが来ている」
その後何とかヘリに乗ることが出来た。

「生き残ったのは、何人だ？」

「6人です・・・」

クソ、俺のせいだ・・・もう少し早くに撤退を決めていれば・・・
ちなみに最初部隊は、12人いた。

「健太、そう自分を攻めるな悪いのは、奴らだ」

奴ら・・・それは、感染者の事だ・・・

感染者・・・奴らは、なぜ生まれたのか・・・それを今から話そう・・・

最初は、アメリカの馬鹿な科学者が息子を生き返らせようと作った
ワクチンが突然変異、

突如にそれは、アメリカの小さな田舎街でパンデミックが起きた。

科学者も死に突然変異をしたワクチン・・・正確には、ウイルスだ
が・・・

アメリカ政府は、それに対し空爆を決定。

こうして事件は、幕を閉じたように見えたのだが・・・

その後一人の未発症者が沖縄へ観光旅行中に発症、パンデミックが
起きたのだ・・・

プロローグ（後書き）

小説を書くのが苦手ですがよろしくお願いします

沖縄県那覇市封鎖

昨日10月13日午後8時・・・

「作戦内容は、分かったな」

俺は、教官の話を聞きながら作戦内容を振り返っていた・・・

2週間前アメリカの田舎町である科学者が作ったワクチンが突然変異し、

アメリカ政府は、米陸軍や海兵隊を導入し救助作戦を行っていたのだが翌日空爆を決定。

こうして事件は、終わった。

しかし1人の長期未発症者が沖縄県へ旅行中に発症、これにより那覇市は、壊滅した・・・

現在は、自衛隊や在日米軍により那覇市を完全封鎖し、その他の地域は、既に感染者を全滅させ、

避難も完了している。

感染者の特徴を言うと身体能力がオリンピック選手並みに上がっている。

噂では3mの壁を越えることも出来るらしい・・・あくまで噂だが・・・

弱点は、頭でそれ以外の場所を撃つと数発なら生きているらしい。

感染方法は、噛まれると感染するらしい。

「おい、田中聞いているのか」

しまった・・・と思いつつすぐに謝った。

「作戦開始時刻は、13:00時だ、これにて解散」

解散の1言でみんながそれぞれ動き出した、そんな中1人の人物が近づいてきた。

俺の友達の佐藤佑樹だ。

「どうしたんだ、健太さつきは・・・？」

「少し考え事をしてたんだ」

「そうか・・・俺は、今日はもう寝ることにするよ」
そう言って佑樹は、自分の部屋へ戻っていった。
俺も今日は、早く寝ようと誓った。

現在10月14日午後1時・・・

「お前達、目標地点に到達した武器の確認をしろ」

隊長である俺の1言を聞いて各自動き出した。

ちなみに俺の武器は、P226とAK-47だ。

「俺達の任務は、この第一検問所を守りきることだ、8名は、俺と共に地上から守れ、スナイパーは、その建物の2階に上がれ」

ちなみに佑樹は、スナイパーだ。

「待て、佑樹・・・気をつける」

「ああ、お前もな」

こうして部隊が配置について20分後・・・

「隊長悪い知らせです、300m先から感染者の群れです、数は、約200匹です・・・」

何だと・・・

「双眼鏡を貸せ」

双眼鏡を使い前方を見ると感染者も群れが近づいてきていた・・・

沖縄県那覇市封鎖（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

防衛戦

「スナイパー狙撃を開始しろ、他の者は射程距離に入り次第攻撃を開始しろ」

そう言いつつ俺もA k - 47の弾薬が装弾されているか確かめたと、早速スナイパーが攻撃を始めた。

「隊長、敵との距離が100mを切りました」

「よし、攻撃開始しろ」

俺の声と共に部下が攻撃を始めた。

10分後・・・・・・・・

「おいそこ、弾幕が薄いぞ」

「敵との距離が20mを切りました」

「感染者がこっちに来た、助けてくれ！」

既に感染者との距離は、20mを切っておりこのままではこちらまで到達する勢いだ・・・・・・・・

さらに弾薬も尽きてきて俺もA k - 47のマガジンが後1本しかなかった。

「全員撤退だ急げ」

俺の声で全員が動き出した・・・・・・・・

現在・・・・・・・・

俺たちは、へりに乗っていた。

俺は気になることがあったので司令部に無線連絡をした。

「こちらアルファ部隊、司令部の太田中佐を出してくれ」
少ししたら太田中佐が出てきた。

「こちら司令部の太田だ」

「司令部の感染者への対策は、どうなっている」

「明日正午まで救出作戦を続けその後は、F2戦闘機を飛ばし空爆を開始する」

「……わかりました」

空爆だと司令部は何を考えているんだ、まだ生き残っている人だっているのに……

「司令部は何だって」

佑樹の言葉で我にかえった俺は、少し迷ったが言うことにした。

「ここを明日正午に空爆するらしい……」

それきり佑樹は、黙ってしまい俺も睡魔に襲われ寝ることにした。

2週間後……

本州でパンデミックが起きた……

防衛戦（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

西日本壊滅

本州でのウイルスパンデミック……

その知らせを聞いたとき俺は、生まれ故郷の群馬県にいた。

佑樹もこの街の生まれで2人で帰ってきていた。

そんな時太田中佐から電話がかかってきた。

「何の用ですか太田中佐、俺達は今休暇中です」

「それどころではない、大変な事態が起きた」

この時点で俺は、ただならぬ雰囲気を感じていた。

「何ですか」

「例のウイルスが本州でパンデミックを起こした……」

「……………それは、本当なんですか？」

「本当だ……………」

詳しく聞くとパンデミックが起きたのは、西日本であり現在大阪を拠点に救出作戦を行なっている。

さらに感染を食い止められなかったら空爆を各地域にするらしい。

「お前は、佑樹と共に急いで大阪の府庁に来い」

そのあと電話を切り俺は、佑樹の家へ向かった。

佑樹は外で犬の散歩に向かうところだった。

「佑樹緊急事態だ、西日本のほとんどの地域パンデミックが起きた。すぐに俺達は、大阪へ行くぞ」

その後俺たちは、急いで大阪に向かった……………

．．．．．アメリカホワイトハウス．．．．．

「大統領、日本に陸軍特殊部隊を送り込みました」

「よろしい、あれは、持たせているだろうな」

「はい、大丈夫です」

これで日本は．．．．．私のもの。

西日本壊滅（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

番外編 ある男の野望（前書き）

この小説毎回文字数少なくてねーか。

番外編 ある男の野望

3ヶ月前・・・・・・・・アメリカホワイトハウス・・・・・・・・

大統領である私、トム・コナーは日々の多忙により疲れきっていた。そんな時部屋に私の補佐官が入ってきた。

「大統領、時間です」

「分かつてる」

今日は、記者会見をする予定だ。

記者会見へ向いながらこう思っていた。

この世界を俺のものにできたら・・・・・・・・と。

報道陣の前に立った私は話し始めた。

1時間後・・・・・・・・

今日も質問攻めにされた私はクタクタに疲れきっていた。

そんな時妻からフランス料理が食べたいと電話が掛かってきた。

ちょうどいい機会だと思った私はOKを出した。

レストランで・・・・・・・・

「乾杯」

妻と私のお互いのグラスをぶつけ合う。

その後話をしながら食べていたら急に外の空気が吸いたくなくなってきた。

「ちょっと外に行ってくる」

妻と別れ外に出た。

そんな時ある男が近づいてきた。

「大統領ですね」

「ああそうだ、で何の用だ」

「これを……」

ある男が渡してきたのはある計画が書かれた紙だった。

「この計画を実行したらあなたは、世界のトップになれます」

私は、この計画に乗ってしまった。いや乗りたかったのかもな……

・

こうして大統領は、この計画を実行する……使いつけてにさられているのにも気づかず。

番外編 ある男の野望（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

特殊部隊ドラゴン(前書き)

サブタイトルは、気にしないでください。一応出てきますが。

特殊部隊ドラゴン

佑樹と共に大阪の府庁に行った俺は、まず太田中佐に会いに行った。佑樹はというと太田中佐が苦手なのでここにいるらしい。

そんなことを考えていたらいつの間にか司令室へやって来ていた。ノックをしてからドアを開けた。

「失礼します、太田中佐はいらっしゃいますか」

「おお、君がよく来てくれた」

なんだか中佐の様子がおかしい、こういう時は何か頼まれるというオチだ。

「実は、君に頼みがある」

やっぱりそうきたか……

「お断りさせていただきます」

「まあそう言うなって、頼みというのはな……お前には警察、S A T、自衛隊の中から選び抜かれて作った特殊部隊ドラゴンのリーダーとなって欲しい。佑樹には君のサポーター兼スナイパーの仕事をやってもらおう、以上だ」

突然の事に動揺した俺は、やりますと答えてしまった。

「部隊の隊員とは、どこで会えば良いのですか」

「会議室を用意してあるそこを使ってくれ」

太田中佐と別れて俺は、佑樹と会議室を探し始めた。

10分後……

「見つからぬーーーーー」

「まあまあそう慌てずに、よく考えれば司令室の隣にあったよ」
ともかく司令室を見つけた俺たちは中に入った。

そこには、選ばれたやつと見覚えのある女性を見つけた。

「姉ちゃん……」

佑樹が言った。そう、この人は佑樹の姉である佐藤綾音である。

「健太と佑樹じゃない久しぶり」

綾音がなぜここに居るかというのは彼女がSATの隊員だからだ。

楽しくなりそうだ……。健太は心の中でそう思った。

特殊部隊ドラゴン（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

番外編 登場キャラ紹介&キャラ募集(前書き)

キャラ募集中!

番外編 登場キャラ紹介&キャラ募集

田中健太

自衛隊の第一師団隊長であったが、那覇市の任務中に部隊の半分が死亡し休暇中に太田中佐から任務が入り特殊部隊ドラゴンの隊長となる。位は軍曹。

佐藤佑樹

健太の幼馴染であり自衛隊の第一師団隊員である。健太と同じく休暇中だったが任務で大阪へ向かう。特殊部隊ドラゴンのスナイパーに任命される。

太田中佐

自衛隊の中佐であり健太や佑樹の指揮官である。

佐藤綾音

佑樹の姉でありSATのヘリコプターの操縦士。特殊部隊ドラゴンに任命される。

トム・コナー

アメリカ大統領。影で謎の動きをしている。

謎の男

大統領に計画書を渡した人物。

登場キャラクター募集中なのでバンバン送ってきてください。

番外編 登場キャラ紹介&キャラ募集(後書き)

御意見、御感想、お待ちしております。

進化する感染者（前書き）

登場キャラクター募集中！

進化する感染者

いろんな奴から話を聞いていると今回の任務の最高指揮官である防衛省長官の福田俊明が入ってきた。

「皆さんに話がある、司令室に来てくれ」

そう言うとすぐに出て行った。

俺達もすぐに司令室へ行った。

そこには、太田中佐や青島大佐それに福田長官もいた。

「早速だが話がある、まずは、これを見てくれ」

長官が見せた映像には驚愕すべき映像が映っていた。

「これは……………」

映っていたもの……………それは、感染者があるビルへと入っていく映像だった。そこまでは問題ではなかった。しかし感染者がその後何千匹も入っていった。

「……………奴らは、進化して群れを作るということを覚えたよ
うだ」

そんな馬鹿な……………人類だつてはるかな時を得て進化してきたのに経った数週間で進化するなんて。

「……………それは、本当なんですか？」

綾音が口を開いた。

「本当だ、この映像を手に入れる前にこのビルの前を通った自衛隊の部隊を何千という数で襲いかかって来たらしい」

「君たち特殊部隊ドラゴンにはこのビルを攻撃して欲しい」

「しかしこんなところにたった20名の舞台で乗り込んでいくのは自滅行為です」

今度は佑樹が口を開いた。

「その点は大丈夫だ、航空自衛隊が空爆をしたのちに攻撃をする」
その後詳しい話を聞いた後俺達は、出撃した。

進化する感染者（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

オペレーションブラックサンダー（前書き）

登場キャラ&登場武器募集中！

オペレーションブラックサンダー

今俺たちは、綾音が操縦するヘリに乗っている。
ちなみに既に空爆は、終わっておりビルから出てきた生き残りの感染者を追いかけてる。

そのとき感染者達が元広島の県庁に入っていた。

「よし、第一分隊は地上へ降りて県庁の中に突入しろ。」

「第二分隊は、ヘリから92式重機関銃を使って感染者が逃げた所をミンチにしろ。」

ちなみに第一分隊は自衛隊とSATの急襲班に所属していたもので作られた部隊だ。

第二分隊はスナイパーやヘリの操縦士で分けられた部隊だ。

俺は、第一分隊で佑樹と綾音は第二分隊だ。

「突入する前に銃の弾倉を確認しろ。」

俺もH&K G36Cの安全装置を外した。ほかの装備はベレッタM92Fだ。

佑樹の装備はドラグノフSVUに俺と一緒に拳銃を使っている。

綾音の装備はH&K MP5A3というサブマシンガンとFNハイパーワードだ。

「突入しろ！」

まずは、部下の一人が偵察に向かった。名前は中村光輝だ。

元は、SATの急襲班に所属していた人間だ。

その時中村が入っていったと同時に県庁の窓ガラスが割れ感染者が数名飛び出してきた。

「撃て！」

俺の声と共にヘリに装備されている重機関銃が火を吹いた。

感染者は全滅した。そう思われていた……

「隊長罷です、左右から感染者の群れが同時にやってきます」

やはり奴らは、進化してきている……

「第一分隊は左右に展開しろ、スナイパー狙撃を開始しろ」

スナイパーが狙撃を開始し始めた、しかしいくら腕がいいスナイパーでもものすごい勢いでやって来る感染者を1発で仕留めるのは難しいようだ。

そんな時さらに追い打ちをかける出来事が起きた。

感染者が県庁の中から数十匹の群れで現れたのだ。

全滅だ……

オペレーションブラックサンダー（後書き）

やっと前回の話で10000アクセスを突破しました。
これからも頑張っていきます。

仲間との絆（前書き）

この小説一回当たりの文字数が少なくてやっと5000文字突破しました。

あと、今回の話は、グダグダなので……………

仲間との絆

感染者が進化してきている……

2日前の防衛省長官の言葉が思い出される。

全滅……皆がそう思っているだろう。

もう、終わりだ……

「あきらめるな、あきらめればお前たちの家族にも会えなくなるぞ」
佑樹の声が無線越しに聞こえた。

そうだ……俺は、何を考えていたのだろう。

ここで諦めたらもう誰とも会えないじゃないか……

「そうよ健太、あなたが諦めたら部隊全員の士気が下がるわ」

今度は、綾音の声が無線越しに聞こえた。

「健太はもつと出来る子なんだから頑張りなさい」

俺は、たくさんの仲間を支えられているんだ……

「……お前達、第一分隊は県庁から出てくる奴らを攻撃し
ろ」

「了解！」

「第2分隊は、左右から出てくる感染者を蹴散らすと共に増援を呼
べ」

まだ諦めたらいけないんだ……

……へり内部……

side 綾音

そうよ、健太まだ諦めないで……

綾音は、心の中で思いながらへりを飛ばしていた。

side 佑樹

そつだ、佑樹まだ諦めるな……
佑樹は、へりから狙撃しながらそつ思っていた。

……大阪府庁内部……

side 太田

「太田中佐、増援要請です」

「陸上自衛隊を向かわせる」

佑樹……死ぬなよ。

……ホワイトハウス……

side トム・コナー

「大統領、日本の特殊部隊があこのビルを攻撃しました」

ここまでは、計画書の通り……

「罠には、掛けたのか？」

「はい、成功しました」

たくさんの人間の考えが交錯する中、新たなる時代の幕開けする……

•
•
•
•

仲間との絆（後書き）

今回はいろんな人の心の中がわかる話にしました。

新種覚醒（前書き）

登場キャラ募集中！

新種覚醒

畏にかけられた俺達は、増援が来るまで時間稼ぎを始めた。

92式重機関銃が多数の感染者を倒していつているのだが奴らは仲間の死体を乗り越えながら前進してきている。

俺も既にH&KG36cのマガジンを5本使っている。

一本のマガジンに30発入っているから既に150発もの弾丸を使っている。

その時へりのローター音が聞こえた。

上を見上げるとブラックホークが飛んでいた。

あれは、増援か……………

「増援が来たぞ！」

ブラックホークから降りてきた増援には、M249ミニミを持ってきているものが多数いた。

突然の増援に感染者がパニックに陥っているところを機関銃で排除していく。

感染者がほとんど死に絶えた時新たな怪物が現れた。

「何だあれは……………」

突如死体となつた感染者が立ち上がった。

そこから体が割れ何かが出てきた。

それは、出てくると同時に空を飛び始めた。

感染者は、新たななる進化を迎えたのだ……………

……………ホワイトハウス……………

S i d e トム・コナー

「大統領、感染者がようやくタイプ2に進化しました」

「そうか」

「しかし未だ個体数は、少ないようです」

「それは問題ではない、次は東日本を狙う」

もう少しだ………日本が私のものになるのは………

新種覚醒（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

中村の死（前書き）

2000アクセス突破しました！！

中村の死

突如現れた新種は、空を飛びながらこちらへ突っ込んできた。幸い1体しかいなかったため一斉射撃ですぐに倒した。残った感染者も先程の増援でほとんどが動かぬ死体へと変わっていた。

「撤退だ、急げ！」

撤退の準備を始めた俺達はあることに気づいた。

「そういえば中村は、どこに行った」

中村は、偵察に行つてまだ戻ってきてないのだ。

「俺が見に行つてくる」

そう言つていこうとすると佑樹に止められた。

「待て、健太俺も行く」

「分かった」

「誰か懐中電灯を貸してくれ……………」

side 中村光輝

クソ、ここはどこだ……………」

偵察のため中へ入つたはいいがいきなり感染者が現れ交戦となり弾薬を使い果たしていた。

その時後ろで何かが動いた。

「誰だ！」

急いで振り返ると猫が空き缶を転がしていた。

「なんだお前か……………」

そうして油断して銃を下ろしたのが間違いだった。

突如上から感染者が降ってきた。

それも数体……………」

H&K G36Cで1発につき1体を倒していく。

最後の感染者に銃を向けると共に引き金を引いた。

「・・・・・・・・何だと」

銃は、弾薬が入っていなかった。

感染者が俺を押し倒し首に噛み付いた。

途切れゆく意識の中あることが思い浮かべられていた。

奴らは俺が銃を下ろすのを待っていたのだと・・・・・・・・

こうして俺の意識は、消えていった・・・・・・・・

side 田中健太

「これは・・・・・・・・」

目の前に広がっているものそれは中村の死体だった・・・・・・・・

後ろで物音が聞こえた。

振り向くと感染者がいた。

こいつが中村の命を奪ったのか・・・・・・・・

「佑樹・・・・・・・・」

「ああ、分かっている」

感染者に銃弾を撃ち込む。

「終わったな・・・・・・・・」

番外編 英雄となった男（前書き）

登場キャラクター募集中！

番外編 英雄となった男

side 太田中佐

「太田中佐、大丈夫ですか？そろそろ休まれては……」

「大丈夫だ……この仕事が終わるまで待つてくれ」

実は、とても焦っていた……

理由は、アメリカへ援軍を送って欲しいと電話したが却下され今いる戦力で戦わなければいけない。

そればかりか今のところ日本でしかパンデミックが起きていなかった。

もう一つは、黒野総理大臣が作った国民には知らせてはいけない計画……

それは北海道を国の首都とし避難民は、自分の住んでいる街を棄て北海道へ来てもらうものだった。

生き残ってる自衛隊や警察の全部隊は北海道と青森県の最北端を完全防備で守るものだった。

その時防衛省長官の福田俊明が入ってきた。

「太田中佐、緊急事態だ……感染者が兵庫県の封鎖戦を破つてここまで来ている」

感染者がここまで来ている……それはここから早く逃げろということ。

「……福田長官、本当ですか」

「本当だ……規定によりここは棄てることになる」

その時自衛隊の小隊が入ってきた。

「ここは、危険です。屋上にヘリが来ていますそれで逃げてください」

い

自衛隊の招待に囲まれながら急いで屋上へ向かった。
その時通路の向こうから誰かが走ってきた。

感染者だ………

「急げ、長官を守れ」

リーダーらしき人間が叫び隊員が銃を構えた。

「撃て！」

多数の銃弾が感染者へ向かっていった。

これにより感染者は倒れた。

さらに歩いてようやく屋上にやって来た。

「長官たちは、このへりに乗ってください」

「君たちはどうするんだ？」

「私たちは、違うへりから追いかけます」

リーダーらしき人が行こうとしたのを私は止めた。

「君の名前は？」

「阪田直樹です」

その時屋上へ通じる扉が開き感染者が数十匹出てきた。

「ここで長官たちが行くのを守りきるぞ！」

感染者達に一斉射撃を開始したがごとく近づかれてきた。

そこで阪田直樹が口を開いた。

「お前たちは先にへりに乗れ、俺がここを守る」

「しかしそれでは隊長が死んでしまいます」

「いいから長官の言うことを聞け！」

その勢いに押されて隊員が一人、二人とへりへ向かった。最後に彼の補佐官である藤井武史がこう言った。

「今までありがとうございます」

ここからは、よく見えないが泣いているように見える。

最後の隊員もへりに向かい阪田一人となった。

阪田が何かをポケットから出した。

あれは………手榴弾！

阪田は感染者の群れに走っていた………手榴弾を持って。

「やめるー………」

私は叫んでいた………そしてへりが飛び始めた。

爆発音が聞こえる………私の意識は、闇の中へと入っていた。

番外編 英雄となった男（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

本州壊滅そして新たな決意

side 田中健太

へりで大阪へ向かう途中に無線が入った。

「大阪に感染者が現れ、さらに東日本にもパンデミックが起きた」

「……………それは、本当なんですか？」

「本当の話だ……………君たち特殊部隊ドラゴンは大阪に向かつてくれ」

そこで無線が切れ佑樹が近づいてきた。

「何だって」

「……………東日本と大阪でパンデミックが起きた」

「そうか……………」

佑樹は、群馬にいる家族が心配なんだろう。俺も自分の家族が心配だし綾音だって家族が心配だろう。

それは、全員が同じだ。

俺は、へりのパイロットである彩音のところに向かった。

「進路変更だ、大阪に向かってくれ」

綾音は、操縦しながら答えた。

「どうしたの、さっきの無線と関係があるの？」

「……………東日本と大阪でパンデミックが起きた」

俺は、佑樹に伝えたと同じ通りに伝えた。

「・・・・・・・・・佑樹は、大阪にこのまま向かうの？」

「ああ・・・・・・・・・そのつもりだ」

綾音が何かを言おうとしたとき佑樹が入ってきた。

「俺、自衛隊やめて家族を助けに行く・・・・・・・・・・」

佑樹が自衛隊をやめる・・・・・・・・・・

「馬鹿なことを言っな」

「いいや俺は本気だ」

その時綾音が口を開いた。

「私たち3人でこのまま群馬にいかない？」

綾音の提案はこうだった。

このチームの中で志願者を募り自分の家族等助けに行くというものだった。

この提案に乗れば家族は助かるが国を裏切るということになる、しかし・・・・・・・・・・

「分かった・・・・・・・・・・家族を助けにいもっ」

この先どうなってもいいんだ・・・・・・・・・・家族を助けるために。

本州壊滅そして新たな決意（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

番外編 登場キャラ紹介？（前書き）

3000アクセス突破！

番外編 登場キャラ紹介？

田中健太

元自衛隊に所属していたがある任務の後、特殊部隊ドラゴンの隊長になる。

しかしオペレーションブラックサンダー後、東日本でもパンデミックが発生し

家族を助けるため志願者と共に部隊を脱走する。 22歳

佐藤佑樹

元自衛隊所属のスナイパーだったが健太と同じく特殊部隊ドラゴンの隊長補佐官になる。

オペレーションブラックサンダー後、健太達と舞台を脱走することを決意する。

健太は幼馴染で、綾音は、姉である。 22歳

佐藤綾音

元S A Tに所属するヘリのパイロット。特殊部隊ドラゴンに入った後もパイロットでいる。

オペレーションブラックサンダー後、脱走を決意する。

佑樹は、弟である。 23歳

太田中佐

自衛隊に所属する士官クラスの間。健太達を特殊部隊ドラゴンに任命する。

普段は厳しいがたまに優しい一面もある。 42歳

福田俊明

防衛省長官。オペレーションブラックサンダーの最高指揮官。
58歳

中村光輝

元S A T急襲班所属。特殊部隊ドラゴンに任命されるがオペレーションブラックサンダー時に
命を落とす。28歳

坂田直樹

自衛隊に所属する小隊の隊長。感染者達から仲間を守るため自ら手榴弾を持って、
感染者に向かっていった。30歳

藤井武史

自衛隊に所属する坂田直樹の補佐官。27歳

トム・コナー

アメリカ大統領。今回のパンデミックに関与している男。60歳

謎の男

全てにおいて今のところ不明な男。

番外編 登場キャラ紹介？（後書き）

健太達が部隊を脱走するといういのは映画「サバイバル・オブ・ザ・デッド」を元にした。

脱走（前書き）

謎の男についてアンケートを取ります。

脱走

————群馬県————

side 謎の男

作戦成功までもう少し……

今私は、群馬のある場所にいる。

その時背後から声をかけられた。

「ここは、危険です。もうすぐこの辺にD・ウイルスが撒かれます。もうじきここでパンデミックが起きます。」

「分かった」

これで日本とはおさらば出来る。この腐った国から……

side 田中健太

俺達は、ヘリの上で部隊を脱走する志願者を募っていた。

「他に部隊を抜きたいものは居ないか？」

現在俺と佑樹や綾音を抜き2人の志願者が出てきた。

名前は、自衛隊に所属していた前原伸治二等兵と警察特殊部隊SATに所属していた新藤翼だ。

二人の家族は埼玉に住んでおり近くということまで志願したのだ。その時ひとり手を挙げた。

「自分も部隊をを抜けます……」

手を挙げたのは自衛隊の青田四郎伍長だ。

「それなら自分も抜けます」

青田伍長に引き続き手を挙げたのは青田伍長と仲が良かったSATのスナイパーだった大森明だ。

「そうか……で、二人の出身地は？」

「自分達は、同じ栃木県で生まれました」

良し結構集まったな……

気付けば脱走者は、7人にも上っていた。

「他に抜きたい奴は居ないか……」

結局あの後誰も志願者はおらず7名で脱走を決意し、残った奴らは大阪へ向かった。

「で、どうやって群馬まで行くんか、それに残った奴らは俺達の事を上に話すかもしれないぞ？」

佑樹が近付いてきて相談してきた。

「ああ、それなら大丈夫だ。上の奴らも俺達をさがすほど暇じゃないさ」

「だがどうやって群馬まで行くんか？」

「それも考えてある。俺達が今居るところを考えてみる」

目の前には、小さな飛行場があった。

「ここならヘリが一機ぐらいあるだろう」

ちなみにここは鳥取県の飛行場で、鳥取県は既に感染者たちの手に落ちヘリを盗んでも誰も文句は言わなかった。

「お前ら、周囲を見渡しながら前進しろ」

幸いにも周囲は見渡しが良く近くには感染者が居なかった。

唯一こちらから見える位置にいる感染者もお食事中でこちらに気づく様子はなかった。

と、そうこうしている内に飛行場内部へと付いた。

「お前達、この中でへりを探せ。生存者や武器があったら俺に知らせること以上」
3人で一つのチームとなり行動を始めた。俺のチームは、人数の問題で四人だが。
気を引き締めていくか………

「見つからねー………」
俺が叫び終わると無線が聞こえた。

「こちら第2班、へりは見つからなかったが自衛隊員の死体から89式小銃とその弾薬の確保に成功」

「よくやった」

これからの時代、武器は多かったほうが良いからな。

「こちら第3班」

ついに三班から連絡がきた。頼むへりよ見つかったくれ。

「へりは………見つかりませんでした」

「そうか………」

このままいけば群馬へは、行けないじゃないか。

頼む何か名案よ出てきてくれ………

「へりは見つかりませんでしたけど代わりにあるものを見つけました」

「何だ」

「それは、軽装甲機動車二両です」

それを聞いていい考えが浮かんだ。

脱走（後書き）

ちよつと中途半端ですがご了承ください。
3000アクセス突破しました！

謎の死体（前書き）

4000アクセス突破しました！

謎の死体

side 田中健太

「いい作戦が思いついたぞ、その軽装甲機動車を使って群馬まで行くんだ」

俺が自信満々に言うと佑樹が呆れながらこっちを見た。

「健太………群馬まで何キロあるんだ？」

「ギク………そうだ、佑樹の言うことは正しい。だが………」

「けどな、これ以外に方法があるか？」

「いや、それはないけど………」

勝った！

「じゃあ俺の作戦で決定な」

「待てよ健太、燃料はどうするんだ？」

佑樹が慌てたように言い出した。

「それは、途中で補給しながら行けばいいんだよ」

佑樹は次の手を考えていたがついに………」

「分かったよ俺の負けだ、その手で行こう」

「よし………第三班、それはどの辺だ？」

第三班がいる場所まで来ると既に第二班も来ていた。

「遅いぞお前ら」

青田四郎元伍長が来るなり文句を漏らした。

「はは、悪かったよ………」

ためー後で覚えてるよ………」

健太が心の中で文句を言っていると佑樹が話題を変えた。

「そつえば軽装甲機動車はどこにあるんだ？」

「それはこの奥の広場です」

答えたのは大森明で青田元伍長は何も言わなかった。

「よしそこに向かおう」

佑樹の言葉で皆が奥の広場に向い始めた。俺なんかより佑樹のほうが指揮官にむいているんじゃないか。

これは、ひどい………

目の前には軽装甲機動車二台の周りに多数の自衛隊の死体が転がっていた。

さらにこの死体は、感染者に殺されていないかつた。

その証拠に死体からは銃で撃たれたであろう傷が多数あった。

「多分これはこの自衛官達の死体でしょうね………」
進藤翼が近づいて死体の目を閉じてやっていた。

「……この軽装甲機動車は、動かせるのか？」

俺は、話題を変えるように言ってみた。

「残念だけど無理だったよ」

綾音が俺の質問に答えた。

そうか………いや待てよ。

「この辺にホームセンターはあるか？」

「待ってくれ今調べる………」

そう言って前原伸治が自分のm.y.パソコンを使って調べ始めた。

「見つかったぞ」

伸治が指を刺したところを見るとそこには巨大複合モールがあった。

「ここには、ホームセンターやショッピングモール、その他日常生活に必要なものが全て揃っています」

「そうだな、そこで物資の補給やこの軽装甲機動車を直す物も手に入るか」

だが一つ問題があった。

「そこまでの距離は何キロだ？」

「えーと、待ってくれよ………2キロだ」
これで問題も解決した。

「よし、行くか」

謎の死体（後書き）

今回でる巨大複合モールは、架空のものです。

感染者との戦い（前書き）

登場キャラ&謎の男について募集中！

感染者との戦い

side 田中健太

今俺達は、モールへ向かって歩いている。

「感染者がいるぞ」

佑樹が静かに言った。

感染者は、10匹程でお食事中だ。

「佑樹、ライフルで奴らを撃て」

普段なら気付かれない限り素通りするがこのままではどういこう通り方を見つかる可能性があった。

「了解！」

佑樹は自分の狙撃銃を出し感染者の頭を撃った。

佑樹の撃った銃弾で一体の感染者の頭が吹き飛ぶ。

その瞬間他の感染者達がこちらを向いた。

気付かれた・・・

感染者達がこちらへオリンピック選手並みの速さで走ってきた。

「戦闘開始だ！」

他の隊員が皆銃を出し感染者に撃ち始めた。

俺も先程死んでいた自衛官から拝借した89式小銃で感染者に銃口を向け撃ち始めた。

感染者達はいくら走るのが速いからって獣のようにやって来る感染者に銃弾を浴びせるのは簡単だった。

少しずつ感染者が倒れていきついに走ってくるのは3匹となった。

しかし感染者3匹は、撃たれる前に木に登った。

「木の上だ！」

全員が木から木を渡って近づいてくる感染者に一斉射撃を始めた。だが今度は木の上・・・銃弾を浴びせるのはさらに難しくなった。

その時背後から唸り声が聞こえた。

振り向くと予想どおり感染者が数十体いた。

こんな時に・・・

「俺は、背後からやってくる感染者達を狙う」

俺は89式小銃からM249ミニミに入れ替えた。

これは、89式小銃より遥かに威力が高く連射性も優れていた。

感染者達に銃弾を浴びせながら近付いてくる感染者に蹴りを入れて倒れたところをミニミで頭を殴った。

その時だった・・・佑樹の呻き声が聞こえた。

すぐに佑樹の方に振り返ると佑樹が感染者に腕を噛まれていた・・・

感染者との戦い（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

本州破棄

side 田中健太

俺は佑樹の腕を噛んだ感染者の額を撃ち引き離した。

「大丈夫か？」

綾音が近付いてきた。

「佑樹……」

綾音は佑樹の手を握った。

「佑樹、死ぬなよ！死んだら俺が許さないからな」

佑樹の目が少しずつ感染者のものに近付いてきている。

どうする……健太が辺りを見渡すと数十メートル先にある警察署が目に入った。

「あそこに警察署がある、あれに逃げるぞ」

俺の言葉に反応して皆警察署に向かい始めた。

「佑樹、歩けるか？」

「ああ、まだ大丈夫だ……」

佑樹の目は既に感染者達と同じ真っ赤に染まっていた。

「綾音も手伝ってくれ」

「ええ、分かった」

二人で佑樹を運びながら感染者が追いかけてこないことに気づいた。何故だ、なぜ追って来ない。

通常感染者は、目の前に獲物がいると獣のように死ぬまで追いかけてくるが今は全く違った。

そうこうしているうちに警察署の前にたどり着いた。

佑樹を急いで中に入れ門を閉めようとした。

そしてそれは見えた・・・閉めようとする俺達を奴らは何かに怯えた様子でこちらを見ていた。
この警察署には何かある。だがそれは今の健太に分かるはずもなかった。

side 総理大臣

「総理、ダメです。アメリカはこちらの訴えを拒否しました・・・」
くそ、アメリカまでもが我々の要求を拒んだか。

「ロシアは、一応海軍を送るとは連絡が来ましたが本州には上陸しないとのことです」

その時部屋にSPが入ってきた。

「総理、30分前感染者が皇居を襲撃しました。天皇陛下は、死亡が確認されました」

「本当かそれは・・・」

「はい、事実のようです」

天皇までもが・・・

やはりあの計画を実行するしか方法は無いようだな。

「すぐに屋上にヘリを呼べ、北海道まで向かう」

私の秘書が驚きを隠せないような目でこちらを見た。

「それは、本州を棄てるということですか？」

「ああ、規定により今から自衛隊、警察、SATは全て北海道に向かってもらう」

2時間後・・・2015年11月三日

「総理、着きました」

いつの間にか私は眠っていたらしい。

ヘリから降りるとすぐに県庁まで連れていかれた。

そこには、防衛省長官である福田俊明や自衛隊の対パンデミック部

隊ドラゴンを創った大田中佐や
その他国土交通省長官や外務大臣、警視庁長官等のVIPが揃って
いた。

「ただ今より会議を始める」
私の言葉で会議が始まった。

それは、酷いもので皆が違う意見を言い合って最終的には本州破棄
が決定した。

その時、自衛官が入ってきた。

「どうした、会議中だぞ」

自衛官が慌てたように言い出した。

「ロシアの艦隊が本州に向け一斉射撃を始めました」

くそ、ロシアめ・・・

本州破棄（後書き）

御意見、御感想、お待ちしております。

番外編 青森の戦い 前編(前書き)

5000アクセス突破しました！

番外編 青森の戦い 前編

side 須藤夏美

「須藤夏美殿、総理が本州破棄を決定されました」

陸上自衛隊に所属する私にその連絡が入ったとき青森県にいた。

何をしていたかというとき青森の最北端で本州最後の砦、青森軍事基地の防衛作戦を行っていた。

感染者達は、大群でこの基地を襲いに来ておりこの基地に所属するすべての部隊が戦っていた。

この基地には迫撃砲や重機関銃、戦車や装甲車があつて全てをフル活用しているが、

感染者は万単位で攻撃してくるのでここも突破されるだろう。

「夏美、何考えてるのよ」

親友の安藤茜が声をかけてきた。

「うっん、大丈夫」

私は、考えるの止めM2ブローニングを使い感染者に撃ち始めた。重機関銃で感染者を倒し続けたが全く減る勢いが無くそれどころかさらなる自体が起きた。

「あれを見る！」

誰かが叫び私は上を見た。

そこには感染者に翼のようなものが生えたものが空を飛びながらこちらに向かってきた。

数はざっと、6体。

「茜！」

茜は、89式小銃を空を飛ぶ感染者に向け撃ち始めた。

私もM2ブローニングを向け撃ち始めた。

空を飛ぶ感染者は全てが落ちていき空には何も飛んでいない状態に

なった。

しかし、私達が目を話した好きに弾幕が薄くなり感染者達にさらに近付かれてきた。

こうなればあれしかない・・・

「茜、そこにあるケースをとって」

「え、これ？」

茜がとったケースを開くとそこには84mm無反動カール・グスタフがあった。

「夏美、それどうしたの？」

「いいから、いいから」

自衛隊の武器庫から盗んできたなんて言えない・・・

私はカール・グスタフに弾頭を入れ狙いを定めた。

狙うは・・・捜すとトラックがありそこに感染者が多数いた。

私は引き金を引き次なる弾頭を入れ始めた。

最初に撃った弾頭は大きな成果を果たした。

トラックに命中し燃料と共に大爆発を起こした。

二発目は・・・その時だった。

爆破して残骸となったトラックの下から何かが出てきた。

それは立ち上がると身長約3mあった。

その怪物は身長以外のところを抜くと感染者そのものだった。

怪物はゆっくりとした足取りでこちらに近付いてきた。

「茜、あれを撃って」

私が言うと茜がM2ブローニングで怪物を撃ち始めた。

怪物の動きが止まり一瞬の隙ができた。

私は、カール・グスタフの引き金を引いた。

それは怪物に直撃し爆発した。

「やったわ」

私が歡喜の声を挙げたがそれは間違いだった。

「嘘でしょ……」

茜がその現実を受け入れられずにいる。

怪物はまだ生きていた。

怪物は唸り声を挙げこちらに走って来た。

それに続き感染者達もこちらに向かって走って来た。

その時怪物が二本のポールの間を走り抜けた。

そういえばあれは……

私が思い出す前に二本のポールが爆発した。

怪物が炎に包まれついに倒れた。

そういえばあれにはC4爆弾が設置されていたのだ。

隣で茜がスイツチを持っていた。

怪物は死んだが未だ感染者が走ってきていた。

「茜、やるわよ」

「ええ、そっちはよろしく」

二人は銃を向けた。

番外編 青森の戦い 前編（後書き）

今回出てきた怪物は、本編では後数話したら出てくる予定です。

番外編 青森の戦い 後編(前書き)

登場キャラクター募集中。

番外編 青森の戦い 後編

side 須藤夏美

「夏美、そつちは頼んだわよ」

「そつちこそ」

二人に加え自衛隊のほとんどの部隊がこの基地前広場に集まっていた。

感染者は、あの怪物が居なくなつて少し統率力に欠けてきている。

司令部は今の内に畳み掛ける気だろう。

M2ブローニングを感染者に向け撃ちまくっていると異変は起きた。先程倒れたはずの怪物が再び動き出したのだ。

そして立ち上がるとこの世の物とは思えない叫びを上げこちらに走り出した。

しぶとい奴・・・

他の隊員も異変に気づき一斉射撃を始めた。

私もM2ブローニングを撃ちまくる。

50口径の弾丸を何十発も撃たれる中怪物は少し痛がって見せるだけだった。

このままではここは突破される・・・こうなればあれしかない。

『司令部、空爆を要請する。場所は防衛拠点から200メートル南下した所です』

『了解、2分後空爆を開始する』

これには驚きを隠せなかった。

理由は空爆を出来るだけのF2戦闘機が残っていたのかということだ。

『全隊員に告ぐ、2分後空爆を開始する。繰り返す、2分後空爆を

開始する』

全隊員に伝わり終わるとそれっきり無線は、聞こえなかった。

怪物は残り200mの地点まで来ていた。

このままでは空爆地点を超えられる。

『全部隊、あのでかいのを狙え。この際他の感染者は無視しろ』

部隊長から無線が入った。

全隊員があゝの怪物に向け一斉射撃を開始しさすがの怪物も動きが止まった。

「後何秒!？」

隣で時計を持つ茜に聞いてみた。

「後・・・30秒」

そこで再び怪物が動き出し走り出した。

今度も一斉射撃を行なったが先程の効果は得られず怪物が空爆地点を超えるまで後100mしかなかった。

「後10秒」

茜が言いカウントダウンが始まった。

「10、9、8、7、6」

この地点で50mの所まで来ており突破されるか、されないかの境目だった。

「5、4、3、2・・・」

『全員伏せるー！ー！ー！ー！』

部隊長の声で全員が伏せた。

向こうから爆発音が聞こえ少しずつこちらに近付いてきた。

ついにF2 - 戦闘機の姿が見え怪物もろとも空爆で焼き払った。

終わった・・・

立ち上がると感染者も怪物の姿もなく全てが灰になっていた。

その時無線がなかった。

『全隊員、司令室に来てくれ』
私達は司令室へ向かった。

「……………司令室……………」

全隊員が集まった司令室は、満員電車並みだった。

「ここに来てもらったのは他でもない。お前達は、本州破棄されたのは知っているな？」

これは全員知っていることだった。

「実は、総理がこの防衛に成功したと知り青森は破棄される地域から外されるらしい」

これは青森でこのまま戦いを続けるというものだった。

「話は以上だ、これにて解散」

sideトム・コナー

「大統領、日本が本州破棄を決定。さらにロシアが本州に砲撃を開始しました」

「分かった、あの男は今何をしている？」

あの男とは計画を立案した張本人だ。

「分かりません」

「そうか……まあいい」

くそが……奴め何をしている。

side謎の男

「長官、ただ今戻りました」

長官の前で敬礼しながら着席した。

今は会議の真つ最中だ。

「遅いぞ、で作戦は成功しそうか？」

「はい、だが予想外の出来事が起こりました。感染者が全く違う進化を遂げました」

そう言いながら写真を渡した。

「これは進化した感染者の写真です」
そこには体長約3mの感染者の写真が写っていた。

番外編 青森の戦い 後編（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

佑樹の死（前書き）

今回はとても悲しい結末になります。
いつも健太のことを支えてきた佑樹が・・・

佑樹の死

side 田中健太

今俺達は佑樹を奥の部屋に運んでいる途中だ。

噛まれてから発症するのに約10分。佑樹が噛まれてから既に5分経過していた。

信じたくはないが佑樹は感染している。

理由は佑樹の目が真っ赤になった事だ。

それは感染者と同じ色だ。

「佑樹、大丈夫か」

佑樹に声をかけながら奥へと連れていく。

「健太・・・俺が死んだら姉ちゃんを守ってくれよ」

その声は弱々しく今にも消えかかりそうだった。

「馬鹿！お前が死んだら俺はどうすれば良いんだよ」

いつの間にか俺は泣いていた。

そここうしているうちに一番奥の部屋に着いていた。

「お前達は周囲を固めろ、綾音来てくれ」

俺は綾音以外の者を全員外に追い出し部屋には佑樹を入れた3人になった。

「佑樹・・・」

綾音も泣きながら佑樹に声をかけた。

「姉ちゃん・・・もう行ってくれ。俺が奴らと同じようになるのを見ないでくれ」

佑樹も今に消えかかった声で答えた。

佑樹が噛まれて9分が経った。

「綾音、そろそろ」

「ええ、佑樹のことよろしくね」

綾音は泣きながら部屋を出ていった。

「健太・・・俺はもうすぐ奴らの仲間入りする」

佑樹は健太の手を握った。

「俺が奴らの仲間入する前の人として殺してくれ」

佑樹は懇願するように俺に頼んできた。

「俺には・・・出来ない」

佑樹はさらに俺の手を強く握ってきた。

「頼む、俺からの最後の願いだ」

もうすぐで10分が経過する。

「分かった・・・」

俺は震える手で拳銃を佑樹に向けた。

「許してくれ、綾音、それに佑樹」

俺は引き金を引いた。

佑樹が最後に行った言葉はこうだった。

「ありがとう・・・」

「綾音」

俺はこの手で佑樹を殺した後真っ先に綾音の下に向かった。

綾音は取調室みたいところで泣いていた。

「すまない綾音。俺が不甲斐ないばかりに佑樹は・・・」

「うっん。いいの」

綾音は立ち上がり俺を見つめた。

「これからは、佑樹の分も生きるんだから」

綾音が笑った。

この底なしの笑顔を見ているとさっきまでの事が洗い流されて行く気がした。

俺は、綾音にいつしか恋心を抱いていた。

綾音の事を何としても守りきる。

そう決意するとどこからか佑樹の声が聞こえてきた気がした。

佑樹の死（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2624w/>

日本ウイルスパンデミック

2011年10月12日16時50分発行